

## 準備委員会企画シンポジウム 2

## 学校現場における開発的カウンセリングの実際

企画者	小林 真 (富山大学)
	稲垣 応 顕 (富山大学)
司会者	稲垣 応 顕 (富山大学)
話題提供者	小林 真 (富山大学)
	廣田 仁 美 (富山大学教育学部附属幼稚園)
	福光 隆 (大沢野町立大沢野小学校)
	島田 みどり (富山大学教育学部附属中学校)
	山岡 和 夫 (富山県立雄峰高等学校)
	丹保 弘 則 (富山県立泊高等学校)
指定討論者	石限 利 紀 (筑波大学)

## 企画趣旨

開発的カウンセリングとは、心の健康を積極的に維持・促進する「育てる」カウンセリングである。今日の学校現場においては、子どもたちが相互に肯定的な人間関係を形成し、自尊心を高めていけるような教育プログラムの導入が望まれる。今回のシンポジウムでは、開発的カウンセリングを取り入れた人間関係作りの実践を紹介する。幼稚園・小学校・中学校・高等学校というそれぞれの現場での工夫と今後の課題を検討したい。

## 幼稚園におけるVLF導入の試み

小林 真・廣田 仁美

幼稚園は家族から離れて、恒常的に他者と関わりを持つ場である。そこで人間関係を積極的に構築するために、2003年・2004年にはVLF教育を一斉保育の時間に導入することを試みた。VLFとは、セルマンが提唱した“思いやりを育てる”教育プログラムである。

2003年は4歳児クラスを対象に、人形劇・紙芝居等により幼児が日常的に経験するいくつかの対人トラブル場面を提示した。登場人物の気持ちを推測したり、ロールプレイで演じる実践を3回行った。保育者は全体的に向社会的行動が増加したという印象を持っているが、話し合いが長すぎて集中力が欠けるといった問題点が生じた。

2004年は5歳児クラスを対象に、子どもたちの日常生活を撮影したビデオ映像の中から、向社会的な行動がみられた場面を選んでクラスで上映し、互いのよい点に気づきあう活動を導入した。しかし映像が短いために当該場面を見逃してしまったり、自分が写っていないことに不満を漏らすなどの問題が生じた。今後は、ビデオの内容の精選、上映のしかたの改良、絵本や紙芝居を併用す

るなどの改善の余地があると思われる。

## 小学校におけるアサーション・トレーニングの効果

福光 隆

アサーション・トレーニングは、相手に配慮しながら上手に自己主張する方法を考え、練習する教育実践である。攻撃的な行動をとりやすい児童にとっては、周囲に受け入れられる形で自分の感情・意見を表現する方法を学ぶ機会になり、うまく自己主張できない子どもたちにとっては、自己表現のしかたを学ぶ機会になると思われる。

2003年には、小学校3年生を対象としたアサーション・トレーニングを実施した。1学期の総合的な学習の時間を10時間使い、担任がトレーニングを実施した。効果測定には事前に開発した攻撃性尺度を用いた。

ワークA：3つの話し方（非主張的・攻撃的・アサーティブな表現）について学ぶ（3時間）

①自分をないがしろにして相手の気持ちを必要以上に大切に「おどおどさん」、②相手の気持ちをないがしろにしてまで自分の意を通そうとする「いばりやさん」、③相手も自分も大切にしようとして、両者が折り合える地点を探そうとする「さわやかさん」のそれぞれの話し方の特徴を理解する。

ワークB：さわやかさんを育てる（2時間）

3つの話し方に目を向け、それぞれの話し方がどんな場面で、どんな相手に対して出てきやすいか、また損なわれがちか、自分の傾向を理解する。

ワークC：インタビューゲーム（2時間）

クラス全体で自己紹介を楽しむ。他者に対して心を開き、自分について表現しあい、自分らしさとその人らしさを味わうことで、お互いの個性を尊重しあう。

ワークD：ほめ言葉のプレゼント（2時間）

活動を通じて、友だちの良いところを見つけ認めること、またほめ言葉を気持ちよく受けとめたり聞いたりするなかで、相手のことも大切にすることを学習する。

ワークE：まとめ—アサーション・トレーニングでの自分の取り組みをふりかえる—（1時間）

プリテストとポストテストの間で、攻撃性の低かった児童に尺度得点の上昇が認められた。これは、当該の児童がアサーティブになったためと考えられる。しかし攻撃性の高かった児童には、尺度得点の有意な低下は見ら